

ぐるっと首都圏

「未来」は自ら切り開く



茨城県立竜ヶ崎一高

①

「母校をたずねる」は今月から、茨城県立竜ヶ崎第一高校（龍ヶ崎市平畑）編をお届けします。県南部の田園地帯にあり、政治や文化、スポーツ界など幅広い分野に卒業生を送り出してきた伝統校。初回は、家電屋大手ビックカメラの社長、宮嶋宏幸さん（56）――1977年度卒――が、「竜一」での思い出や卒業後を振り返ります。

【根本太二】

信州（長野県）の、NHK大河ドラマ「真田丸」で名が知れた上田市から中学3年への進級前、父の仕事の都合で茨城県取手市に引っ越して来ました。竜一（竜ヶ崎一高）を選んだのは、伝統と丘の上に建つ風格を感じさせる校舎が気に入ったからです。私鉄、国鉄（現JR）、さらに私鉄の乗り継ぎで片道1時間ほど、自宅からは遠かったのですが、

ビックカメラ社長 宮嶋宏幸さん 1977年度卒



高校は、バスケットボール漬けの3年間でした。部員が少なすぎて同級生も2人だけでしたが、目標は県大会ベスト8。結果的に16強止まりでしたけど、休みは益と正月の数日だけでした。体育塾が狭くて、バレーボール部と平々に使っ

みやじま・ひろゆき 1959年生まれ。84年法政大文学部英文学卒業後、「大卒1期生」としてビックカメラに入社。営業本部長などを経て2005年、46歳で社長就任。15年8月期の連結売上高は7953億円で業界2位。ルネサスエレクトロニクスから15年に引き継いだ女子ソフトボール部（群馬県高崎市）は日本代表選手が複数所属する強豪チーム。

て、潤ってでは体壇部が練習していたほどです。なのに雨が降ると体育館は野球部に占領されてしまう。廊下を走るだけで、ボールを持つ練習もできない。まあ、仕方ないというか、野球部は強かったですから。私が入学した1977年5年には夏の甲子園にも出場したんです。

地元期待 1900年創立

校章に2頭の竜



校門を飾る竜ヶ崎一高の校章。1930年度の卒業生で切り絵作家の高野恒雄氏がデザインした。茨城県龍ヶ崎市で

茨城県では明治中期、土浦中学（現・茨城県立各地で激的な中学（旧制）土浦第一高等学校）の分譲校運動が盛り上げられ、校として創立。02年に独立したという。竜ヶ崎一高は地元の期待を担って、1900（明治33）年、第二次大戦後の48年、

学校行事で最大のイベントが文化祭でした。3年に1度しか開催されないんです（現在は毎年）が、ちょうど私が3年生の時に開かれ、全体スローガンは「友よ！ 限りない未来へ旅立とう！」。燃えましたね。バスケットも「あなたほどんな青春の中に生きていますか」なんて掲げてました。ただ、輝いた青春時代とは言っても、将来に確かな夢を描いていたわけではありません。1浪して大学の英文科に入ったのは「何となく教諭になりたい」と考

えたからでした。日本経済の右肩上がりは永遠に続くと思われて疑わなかった時代。だったら、いろいろな世界を見ようというアルバイトに明け暮れました。宮大工、塾講師、就職情報誌の営業……。関係経験のある地元選出参院議員の秘書も務め、地元での結婚式に代理で出席してあいさつしたり、選挙ではアルバイトを配って票田を確保下げて歩いたり。そんな中で性に合っていると思えたのが、小売業でした。実家近くの大型スーパーで、高級の冷蔵車がほぼ毎日1台、売れたんです。モノを売る喜びに燃えました。

卒業時にたまたま出会った別の大学の先生に紹介されたのが、ビックカメラでした。先生が言うには「お前みたいな男は大手に就職しても歯車止まりだ。ベンチャーの小さな会社で、とにかく3年間は頑張れ」と。その言葉が妙に気に入ったんです。当時の弊社は地産に由

私は社長室を持ちませんが、商品仕入れや営業本部のあるフロアで現場と同じ空気を吸っているんです。「夢をこぼり実行」（男尊感成長を止める）。これは、クラスの卒業文集を作るにあたって、日本史の先生が寄せてくれた一文です。今も文化祭の冊子と一緒に大事にしています。元同級生11人とは都内でたまに飲み会をするんです。職場も違う仲良し元同級生同士の会話から生まれた一つに、日本航空と弊社とのポイント（マイル）交換提携があった点をつけ加えさせてください。



一人は柔道で金メダルを獲得した。近年は出場機会を逸しているものの、野球部は旧制中時も含めて甲子園に春夏10回出場。射撃部も近年の全国大会での女子団体優勝を機に快進撃を続ける。開校時の校訓は「誠実 剛健 高潔」。後に「協和が加わり、今も引き継がれている。全国で多くの学校が校名や地域の頭文字を模した校章を校章に取り入れているが、竜ヶ崎一高の校章は、2頭の竜がデザインされているのが特徴。現在も、美しいアロンスの校章が正門にはめ込まれ、2頭の竜が生徒たちを鼓舞している。

学制改革に伴い新制高校に改編。これまでに約2万4000人の卒業生を送り出してきた。かつての重厚長大政策を支えた日本鋼管の元社長・河田重氏や、総合商社・丸紅の初代社長の市川忍氏、あるいは元二科会常務理事の洋画家、服部正一郎氏らを輩出した。運動部も輝かしい実績を持つ。64年の東京五輪では陸上部員が聖火リレー走者を務め、卒業生の